

エッセイ

## 小学校教員・定年のあとさき

浦野 裕司

今や「定年」と言っても、人生の仕事仕舞いの意味は薄れている。一つの通過点に過ぎないのかもしれない。とはいえ、当事者になってみると、やはり「定年」の言葉のもつ響きは重たい。

そんな二文字が頭から離れぬ定年前後の日々に、感じたこと、考えたことを整理してみた。

### 定年前、最後の担任クラス

いよいよ定年を迎える区切りの年に担任したのは、四

年生のクラス。私にとって、現役最後のクラスだ。三年時には、若くはつらつとした女性教員が担任していた。そのクラスを引き継いだ新担任の私は、若くもなく、はつらつとしてもいない。子どもたちに「受け入れてもらえるかなあ」と、正直なところ、かなり心配していた。

始業式の後、クラスの子どもたちを前にして「こんなおじさん先生に替わってごめんね」と、率直な気持ちを伝えた。すると一人の女子児童が、明るい声で「大丈夫でーす」と答えてくれた。「大丈夫」の意味をどう捉えれば良いのか。少々複雑な気持ちになったが、底抜けに

明るく素直な子らと過ごす日々は、実に楽しかった。

そんなクラスで最初に発行した学級通信の内容が、次の文章だ。

\*\*\*\*\*

平成30年(2018年) 4月9日発行

4年3組学級通信「ホッ！」 第一歩

「笑顔の方へ一歩ずつ」

今から三十年以上も前のこと。障害児学級(現・特別支援学級)から通常学級の担任に替わって初めて受け持ったのが、四年生のクラスでした。個性豊かな子がいっぱい、とても楽しいクラスでした。よい思い出がたくさんあり、そのころ担任した子たち(もう四十才をすぎています)とは今でも会う機会があります。なんとそれ以来、二度目の四年生。どのような一年間になるのかなあと、わくわくしています。

この学級通信のタイトル「ホッ！」は、いくつもの意味をこめてつけました。まずは四年生の国語の教科書で最初に学ぶ草野心平さんの詩「春の歌」から。「ほつまぶしいな」で始まるこの詩のように、みんながおたがいのすてきな所に気づいて「ほつまぶしいな」と感じられるようなクラスであってほしいということ。

二つ目は「ほつとできるクラス」であってほしいから。失敗しても、気分が落ちこむことがあっても、いつもだれかが支えてくれたりはげましてくれたりする。そんな「ほつとできるクラス」であり続けてほしいと思います。

三つ目。とにかく「ホットなクラス」にしたい。勉強も遊びも、係や当番の仕事も、やるときは思い切りやって、がんばったり楽しんだりできる。自分のよさに自信をもち、いつも熱い心をわすれずに毎日をすごしてほしいなあと考えています。

私の大好きな作家の小説に、次のような一節があります。

トロワ(\*)で働くようになって、店先でお客さんと顔を合わせているうち、仕事というものは誰かのためにすることなのだとう当たり前のことに思い至った。その「誰か」をできるだけ笑顔の方に近づけること――それが仕事の正体なのではないか。どんな職種であれ、それが仕事と呼ばれるものであればそれはいつでも笑顔を目ざしている。

\*筆者注／「トロワ」はサンドイッチ屋の名前(吉田篤弘著「それからはスूपのことばかり考えて暮らした」より)

三つの「ホッ！」があふれるクラスは、笑顔でいっぱい  
のクラスになるはず。みんなを笑顔の方に近づけられ  
るよう、勉強面も生活面もいろいろと工夫していきたい  
と思います。みんなも、友達を笑顔の方に近づけられる  
ようにするために自分ができることは何か、どんどん見  
つけていってください。 みんなですてきな一年にしま  
しょう！

\*\*\*\*\*  
学級通信に期待を込めて書いた通りの、すてきな一年  
で教員生活を締めくくれたのは、何よりも幸せなこと  
だった。

### 定年という節目を超えて

そして迎えた定年。いつかはその日が来ると覚悟はし  
ていたが、実際にその日が訪れてみると、意外なこと  
あまり大きな感情の動きは無かった。新人育成教員とい  
う立場に変わりはしたものの、十五年も勤務してきた小  
学校での再任用。週四日勤務ながら、新人教員と二人三  
脚で一つのクラスを受け持つから、教室で子どもたちと  
触れ合う日常はさほど変わらない。子どもの成長と新人

教員の成長という、異なる成長を見守れる立場はなかな  
かに味わい深いものだ。

感情の動きに比べ、学校現場の見え方は大きく変わっ  
た。どつぷりと教育現場に浸かっていると見えのないのに、  
少し肩の力を抜いた途端に見えてくる景色があった。

「岡目八目」とは少し異なるような気はするものの、小  
高い丘の上から俯瞰するような感じであるのは確かだ。

これまで大切だと信じて疑わなかったことが、あまり  
意味のないものに見える。反対にあまり重要視してこな  
かったことが、実はとても大切なものに見えてくるのだ。  
以下に、以前に発表した文章の一部に少し手を加えて、  
定年のあとさきで感じてきた教育現場のあれこれを書き  
記してみることにする。

### 環境としての教員、その言動について

身近な大人の言動は、小学生の素直な心に大きな影響  
を与える。とりわけ「先生は最も影響力のある教育環  
境」と言われるだけに、その影響は計り知れない。

先ごろ、教員同士の深刻ないじめが明らかになったが、  
教育環境という視点から見ると最悪レベルのものと見える。

これほど酷いものは論外だが、教育環境としての教員の  
姿勢には、心配なことが多々ある。代表格が言葉の乱れ。  
ある学校の職員室に居合わせた折に、こんなやり取りが  
聞こえてきた。

「明日の遠足、雨で延期になりそうだよ」↓「マジ  
か？」

「あの書類の提出期限、今日だったよね？」↓「ヤバイ、  
忘れてた！」

「○○さんの作品、メチャクチャいいね」↓「メツチャ、  
いけるよね」

教員に成りたての若者同士のやり取りではない。いず  
れも、学校全体を牽引する立場にありそうな中堅教員の  
ものだ。会話をしている当の本人たちは、何も感じるこ  
ともないのだろうが、私は耳を塞ぎたくなった。こんな  
会話を聞き続けているうちに吐き気までしてきた。

知り合いの若手教員にこの話をしたら、「ドキッ。私  
もすぐに『ヤバイ』って言っちゃいます」、「そういえ  
ば、『メチャクチャ』ってつい使っちゃいます」などの  
反応が。「何でも『ヤバイ』とか『メチャクチャ』の一  
言で済ませる習慣は変えた方がいいんじゃないかな。特  
に子どもの前ではね」と返した。すると「これから『ヤ

バイ』を使わないようにします」と宣言。しかしその後、  
五分ほど会話する間に、彼女たちは「ヤバイ」を何度も  
口にした。「またヤバイって言ったよ」と指摘すると  
「マジですか。メツチャ、ヤバイ」と言う。苦笑するほ  
かなかった。

初任の学校で出会ったY先生の指導は、今でも私の目  
標だ。いつもしつとり、丁寧な言葉づかいが印象的だっ  
た。反抗しがちな六年生の子どもたちを前に、決して声  
を荒げることなく美しい言葉で指導し、子どもたちはの  
びのびと育っていた。同僚の教員に対しても、同じよう  
に丁寧な言葉で接してくれた。

慌ただしさの中で、私もつい声を荒げたり、はやり言  
葉でやり過ぎたりすることがある。教員の言葉や行動  
は、子どもたちに大きな影響を及ぼす。自分自身が重要  
な教育環境であることを忘れずに、子どもたちと関わっ  
ていきたいものだ。

### 叱らずほめる

ある日、若手教員から相談を受けた。授業中の子ども  
の姿勢が悪いと管理職に指摘され、悩んでいるそうだ。

「厳しく指導しても、なかなか姿勢がよくなりません」と言う。

「厳しい指導は、行動をストップさせる効果はあるが、よい状態を継続させる力はないですよ」と私。

「じゃあ、どうすればいいんですか」といら立ち気味のA先生に「姿勢を正しくすることのメリットを伝えればいい」と、過去の経験を伝えた。

授業中の姿勢の悪さが目立つM男が、ある日、五十メートル走のタイム測定で友達に負けて悔しがっていた。

「体の軸がぶれないようにするといい」と助言すると「どうすればぶれなくなるんですか」。「腹筋や背筋を鍛えるといい。授業中、姿勢をよくしているだけでも鍛えられるよ」と教えた。

その後：授業中にM男の姿勢が崩れていると、そつと近づき耳元で「腹筋・背筋」と囁き、よい姿勢の時は「おう、鍛えてるねえ。すばらしい！」と大きな声でほめた。

運動会でリレー選手を目指すM男の姿勢は、次第に美しくなっていた。思わぬ波及効果も表れた。他の子どもにも刺激となり、よい姿勢を意識する子が増えたのだ。望ましくない行動を見つけた教員は注意したり叱った

い面があることは否めない。

定年まであと数年という時に、管理職による業績評価について開示請求を試みた。通常はどのような評価がなされ、教育委員会に報告されているか知らされない内容である。開示請求するのにたいした手間が関わるわけではないが、結果を知ることによるメリットがあまり感じられなかったのだ、ずっと素通りしてきた。けれどもこの年、もうじき定年だから一度は開示請求してみようと考えたのだ。

さて、その評価内容である。開示されたものを目にして、言葉を失った。評価が思いもかけぬ内容だったからだ。その時に担任していたのは、荒れがちで対応の難しいクラスだった。厳しい日々が続いたが、子どもたちの人間関係の調整と授業の充実に努力を重ねて、なんとか全員が笑顔で卒業する日を迎えた。しかし学級経営に関する評価は、A B C Dの四段階で、下から二番目のCランク。納得がいかず管理職に説明を求めたが「あのクラスの実態ではねえ。これは業績評価だから」という回答。教育現場での業績とは何なのか、深い疑問が残った。

保護者による評価もわかり。いじめや不登校への対応は、やり方を誤ると子どもの心を深く傷つけてしまう。

りするが、効果は一時的なことが多い。より効果があるのは、望ましい行動をほめることだ。子ども自身が目的意識をもてるように働きかければ、さらに効果的だ。

小学一年生の時の私は、姿勢が悪くおしゃべりだった。しばしば担任に叱られ、背中に一メートルの定木を入れた。だが効き目はすぐに切れ、背中に定規を差したまま後ろを向いておしゃべりし、さらに叱られる毎日だった。

二年生になると、優しくて笑顔の素敵な、新規採用の女性のC先生が担任になった。緊張に固まっていた私を、先生は勘違いしたのか「いい姿勢ですね」と笑顔でほめてくださった。以後、C先生にほめられたい一心でよい姿勢を保とうとした日々の努力は、今も私の姿勢を支えてくれている。

### 教員への評価

教員への評価が始まってから、教員は管理職から、そして保護者から、そして子どもからも評価される立場に置かれるようになった。もちろん指導の在り方の改善に評価は必要だ。しかし、教育の仕事は簡単に評価しにく

細心の注意を払いながら進める必要があり、当事者以外には見えにくい。小さな芽のうちに適切に対応していても、多くの保護者からは「あまり積極的に取り組んでいない」という評価を受けてしまうこともある。見えにくいことは「やっではない」と評価されやすいのだ。

子どもからの評価には別の課題がある。教員から厳しく指導された子どもが、その指導に意欲返しをするかのように低い評価をつけてくることがある。ただ、子どもの評価については、その背景を理解したい。何を訴えたかったのかをきちんと見極めることが大切だ。低い評価の背景には、「自分のことをもつと受け止めてほしい」という切実な願いがあるのかもしれない。そんなふうに変えられれば、理不尽に思えるような教員への評価も、意味のある評価に捉え直すことができる。

いつも子どもを評価する側にある教員だが、評価される側になって初めて見えてくるものがある。的外れな評価、納得できないような評価は、次に生きる評価にはなり得ない。だめなところを指摘されるだけでは、前に進めない。努力したことやその成果を見逃さず、前向きに歩もうとする意欲を引き出す評価。子どもたちには、そんな評価のできる教員でありたい。

### 子どもの怒り

二十年近く前のこと。六年生の国語の授業中、T男が突然「コンチクショウ！」と大声を上げた。ささいなことと近くの子になじられ、カチンときた様子。机を倒さんばかりの勢いだ。「やめなさい！」と大声で注意しようものなら、T男の怒りは爆発しかねない。

そこで、黒板に大きく「コンチクショウ」と書いた。ざわつく教室。「あのさあ、コンチクショウってどういう意味かわる人いるかな？」と穏やかな口調でクラス全体に投げかけた。きよとんとした顔をする子どもたち。

しばらく待つと、国語が得意なK男が手を挙げた。「コンはわからないけど、チクショウはけどもののことだと思えます」。

「なるほど、ありがとう」と伝え、「チクショウ」の横に「畜生」だけだもの」と書き足した。そして「では、コンは何なのかな？」と次の質問。一触即発の状態だったのがうそのように教室は静まり返った。T男も真剣なまなざしでこちらを見ている。

C子の手が挙がった。「コンはたぶん『コノヤロウ』

なんていうときの『コノ』がなまったんだと思います」

私は「ううむ、すばらしい解釈だね」と応じ、「コノ」ヤロウ」と書いた。「そうか、コンチクショウは『このけだものやろう』っていう意味なんだね。T君、K君、Cさんのおかげで一つ勉強できました。それにしても『このけだものやろう』っていうのはものすごい言葉だねえ…」

さらに続いたやり取りは割愛するが、みんなで大笑いした後、T男も含めた全員が何事もなかったかのように授業に取り組んでくれた。

子どもの怒りに怒りをもって応じてしまえば、火に油を注ぐことになる。教員は今、背負いきれないほどの多くの課題とそれに伴うストレスを抱え、ちよつとしたことで短絡的に反応しがちだ。ずいぶん前の授業で的一幕だが、慌ただしさの中で気持ちにゆとりがなくなると、この出来事を思い出すようにしている。

### 夏休みの宿題

数年前、五年生の担任だった時のこと。夏休みに入つてすぐ、ある母親から相談を受けた。「うちの子には宿

題、多すぎです。計算練習はともかく、漢字練習はやりきれそうもありません。何とかありませんか」

夏休みの宿題をどの程度出すかは、悩むところだ。小学生の時ぐらい、夏休みらしい生活や体験をたっぷりしてほしい。だから最小限にしたいのだが、少なければ少ないで「だからだら過ごしてしまつて困る」という声も聞こえてくる。学年の教員間で考えが異なることもあるから、意見のすり合わせも必要だ。結局、平均的な子ども像をイメージし「これくらいが適量だろう」という分量に落ち着くことになる。

しかし、この「適量」というのが曲者だ。運動でも食事でも「適量」は一人ひとり違う。好き嫌いもある。学習課題も同様で、ある子にとっては苦勞せずに行ける分量でも、ある子には手に余るほどということがあるのだ。さらに学習内容の好き嫌いは、取り組み方に大きく影響する。クラス全員に共通の「適量」などあり得ない。

冒頭の母親には「ご家庭で調整していただいて構いません。お子さんにとって、負担が大きすぎないような分量にしましょう。その分の時間を自由研究や、最近興味を持ち始めた読書などに使ってください」と伝えた。母親は「いいんですか？」と半信半疑だったが、「だって

その方が、お子さんにとって意味のあることじゃないですか」と答えると、ほつとしたようにうなずいた。こんなことは一学期末にきちんと伝えておくべきだったと反省させられた。

夏休みの宿題に限ったことではない。日常の授業や宿題でも、どんな課題をどの程度させるかは、腰を据えて考えなければならぬ問題だ。「子どもの脳はみんな違う」という当たり前のことに、もっと注目すべきなのだ。どのような課題の与え方をすれば、意味のある「適量」が実現できるのだろうか。それが私にとっての夏休みの宿題となった。

### 「個人仕様の宿題」から「個人仕様の日常の学び」へ

さて、夏休みの宿題の成果である。

F男は、授業中、あまり課題に取り組まず、宿題もあまりやって来ない子だった。学校や家庭で声かけしてもさしたる効果はなく、学習に向かうスイッチが入らない日が続いた。

そんな中で試みに始めたのが、F男だけのための特別な宿題だ。やる気が起きない宿題を出しても、ただ面倒

くさがるだけで取り組もうとしない。こんなことを繰り返しては、F男の学習意欲は低くなるばかりだ。そこで全員に課しているものとは別に、F男が興味をもてるような特別な宿題を出すことにした。

F男はコンピュータゲームが得意。形を捉える力が高いのではないかと考え、絵の間違い探しや図形パズルを与えてみた。翌朝「かんだんだったよ」と、自信満々に課題のプリントを提出するF男。「これ、けっこう難しい問題だけど、すごいなあ」と伝えると、まんざらでもない表情を見せた。少しずつ難度を上げつつ、F男が苦手とする文章読解も加えることにした。文章読解の宿題には抵抗を示したので、クイズ的な要素のある問題のオプションを複数提示し、F男が選べるようにした。

「先生から与えられる宿題」から、内容も分量も調整可能な、いわば「個人仕様の宿題」に変わったことの効果は大きく、自ら課題に取り組み姿勢が生まれるきつかけになった。

一か月ほど経つと、F男は通常の宿題も提出し始めた。そればかりではない。授業にも意欲的に取り組むようになり、当然の結果として成績も伸びた。驚いたのは、F男の特別宿題を目にした他の子どもたちから「ぼくもや

りたい」、「わたしにも出して」という声が次々と上がったことだ。子どもは本来、学びたがる存在なのだということも改めて思い知らされた。

宿題だけでもこのような変化が起きるのならば、授業の工夫次第でさらに大きな変化が起こせるはず。子どもの興味関心や学び方の特徴を生かした授業に変えようと、「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」の視点を生かした取り組みを重ねている。

\*「学びのユニバーサルデザイン」については、後日、稿を改めて書き記したい。

### ICTが学びを変える

六年生のS男は、作文が大の苦手。作文の時間は原稿用紙を見つめたまま、時が過ぎるのをひたすら待つような子だった。

二泊三日の移動教室が終わり、思い出作文を書く時のことだ。S男に「タブレットを使って作文を書いてみない？」と、声をかけてみた。「えっ、いいんですか」とS男。「家でタブレットを使って勉強することがあるって、お母さんから聞いたよ」の私の言葉に、S男は何度

もうなずいた。

高学年の教室に児童用のタブレットPCが導入されて間もない時期。子どもたちはまだ、その使い方に十分に慣れているとは言えない頃だった。しかしS男は、原稿用紙に向かうのとは別人のように、PCでの作文に取り組んだ。キーボード入力で、どんな文章を打ち込んでいく。休み時間になってもその勢いは止まらず、原稿用紙七枚分の力作を仕上げた。分量だけではない。体験した様々な思い出が、生き生きとした文章で表現されていた。S男は、決して作文が書けない子ではなかった。紙に字を書くことが極端に苦手なために、頭に浮かぶ言葉をアウトプットできずにいたのだ。

あれから数年が過ぎた。ICT環境の充実とともに、授業は大きく変わりつつある。電子黒板やデジタル教科書で授業は分かりやすくなった。子ども自身が情報を集め、活用しながら課題を解決する授業。友達と情報交換しながら、調べたことや考えたことを発表する授業。そんな授業が日常的に行える。何より嬉しいのは、子どもが学び方を選択できること。多様な子どもたちの多様な学び方が可能になりつつある。

ICT環境の整備はまだまだ、という学校は少なくな

い。せっかくパソコンが配置されても、あまり稼働していない学校もあるという。環境整備とともに必要なのが、教員側の意識改革だ。「作文は作文用紙に書くもの」という固定観念に囚われていたら、S男は卒業までずっと「作文が書けない子」でいたことだろう。ICT機器を「先生が教えるのに便利な道具」から「子どもたちが学ぶのに役立つ道具」に。どの学校でも当たり前になる日が待ち遠しい。

### 新任教員の育成

「分からないことは何でも気軽に聞いてほしい」「分からないことだらけで、何が分からないのかが分かりません」

十年前に学年を組んだ新任教員との会話だ。想定外の反応に驚いたが、これがスタートラインに立ったばかりの教員の偽らざる心境なのだろう。

定年後の一年目は、新人育成教員としてD先生の育成に関わることになった。私の授業の様子を見てもらったり、D先生の授業や学級経営へのアドバイスをしたりするのが仕事の中心だ。

四月。授業を見ていて、代わりに授業をしたくなる衝動にしばしば駆られた。板書の漢字の書き順が違うというようなレベルならまだいい。何を答えればよいのか分りにくい曖昧な指示や発問に、混乱する教室。子どもたちの意見を十分に引き出せないまま、一方的に説明して終わらせてしまう授業の進行。落ち着きの無い子どもたちの言動に苛立ち、つい声を荒げてしまう姿。私自身もかつてはそのような授業を重ねていたのだが、今の立場からはどうにも気になって仕方がない。胃が痛くなるような日々が続いた。

このような実態を変えようと、私が繰り返し伝えてきたのは次の三点だ。

①教える側の視点からではなく、学ぶ子どもの側の視点に立って授業計画を立てること。

②子どもたちの得意、自分自身の得意を生かすこと。

③いろいろな先生から学ぶ姿勢を持つこと。

D先生は、戸惑いながらも私の言葉を受け入れ、努力を惜しまずがんばってきた。ある朝、校庭で、体育の授業が得意な中堅教員と何やら話しながらラインを引いていた。体育の授業についてアドバイスを受けているようだ。その日の体育の授業では、目標をもって生き生きと

明るい未来を予言する易者だ。

期待通りに勉強してくれない子を前にすると、教師はつい「ししないと後で困るぞ」、「中学校で苦労するからね」などと言って、暗い未来を占う易者になる。しかし、暗い未来を予言しても子どもたちにはたいして響かないし、変化は期待できないのが現実だ。

駆け出しの教員時代に担任したS男は、実に漫画が上手だった。ただ上手なだけではなく、オリジナル性に富んでいた。けれどもこのS男、漢字の書き取りが大の苦手だった。漢字テストがあると、百点満点で十点か二十点が関の山だった。漢字テストの時間といえば、わずかに覚えている漢字をテスト用紙に書くと、さっさと裏返し、そこに楽しい漫画を描くのが常だった。私はそんなS男の漢字テストを採点する際に、裏側の漫画にも点をつけた。表面は十点か二十点でも、裏面はいつも花丸付きの百点満点だった。「困ったなあ」と感じつつも、「君は漫画名人だね。きつと漫画の世界で活躍するようになるよ」と伝えた。

S男はよく「漢字の無い国に行きたい」と嘆いていたが、高校進学の際にその思いを実現した。英語圏の国に留学したのだ。後押ししたのは父親。「やりたくないこ

運動に取り組む子どもたちの姿が輝いていた。ほんのわずかの期間で、ICT機器を巧みに使い、子ども同士のコミュニケーションが多い授業を目指して工夫を重ねるようになった。D先生の若さとチャレンジ精神が眩しい。他校で教員をしている知人から、「新人教員が夏休みを待たずに退職してしまった」という話を聞いた。子どもや保護者との関係がうまく築けなかったり、指導する教員との軋轢があったりして、精神的に参ってしまいう新人がいるという声も、あちこちから聞こえてくる。

新たな課題が次々に押し寄せる学校現場に、今年も新人教員が大量に誕生した。一人一人の持ち味とチャレンジ精神を大切に、課題に立ち向かう新人教員の伴走者としての役割を果たしていきたい。

### 今、改めて考える「教員の役割」

教員は学校でいろいろな役割を担っているが、その役割について、「者」の付く職業に例えられることがある。「学問を伝える学者」、「いろいろな役割を演じる役者」、「集団を統率する指揮者」など、さまざま。私が特に意識してきたのは「易者」の役割である。それも、

とはやらなくていい。その代わり、やりたいことが見つかったら徹底的にやれ」という子育て論の実践者だった。高校、大学と海外で過ごしたS男は、今、漢字とはあまり縁の無い世界で活躍している。パソコンを屈指する映像関係の職業に就いたのだ。

世の中の動きが大きく変わりつつある昨今、苦手な面よりも得意な面に着目した教育の意義が増している。教員の立場からすると、S男の父親のように「やりたくないことはやらなくていい」とまで言い切れることは難しい。それでも、子どもたちの明るい未来を占えるような易者の役割を果たせる教員でありたいものだ。

### 今が未来を創る

定年間際の数年間、どのクラスでも子どもたちに繰り返し伝えてきた言葉がある。

「未来は今の積み重ねの先にある。だから、今を大切にすることは未来を大切にすることなんだ。『今が未来を創る』ということを頭の片隅に置いておき、時々思い出してほしい」

こうやって文章にすると少々気恥ずかしいが、子ども

たちは私の期待以上にこの言葉を記憶に留めてくれているようだ。

定年の日まであと一か月余りの昨年二月、知人に紹介された絵本作家の原画展に行った。暖かで優しい世界が表現されている原画の数々。凝りに凝っていた神経が、ゆっくりとほぐされるような気持ちになった。その原画を使った絵本を手にしてパラパラとめくっていくと、次の詩が目にとまった。

明日のことを心配していたら

今日が昨日になっていて、

呼んでも、戻っては来ませんでした。

「今日」は「明日」を心配するために

あるんじゃないかと、

明日のわたしのために、生きる時間なのです。

(かめおかあきこ「木もれびより」スマイル  
ブックス刊)

その頃、定年を少し過剰に意識するようになっていた私だったが、この詩は心に深く沁みだ。意味の無い緊張や心配から解放されたような心持ちだ。

今の自分がやりたいこと、今の自分ならできること、そんな「今」を大切に生きた先に、どんな未来が待っているのだろうか。